

牧会カウンセリングの 新たな可能性を探る

窪寺 俊之

はじめに

主イエスが見た人間の現実、病気、わずらい、弱り果てた人々、倒れた人々で満ちた痛々しい現実であった。主イエスの心は、張り裂ける程の痛みで捕われたと聖書は記している（マタイ9：35～36）。主イエスはその時代に生きた人々の痛みと苦しみに心を痛めたことが、イエスの教え、福音宣教、患いの癒しと直接に結びついている。今日の世界も、人々の様子も、イエスの時代とほとんど変わらない。

現代社会の非人間化は、ますます加速化し、深刻化の道を進んでいる。科学技術の進歩、経済活動のグローバル化などが、地球規模で社会基盤の変革をもたらしている。それらの変革は、生活環境を極度に脅かし、人々の精神生活の基底を動かし、将来を不透明にし、人間関係を破壊させ、信頼を不信に変えつつある。

現代人は、不安の中で魂の安らぎを求め始めている。安らぎの場を失った魂は、この世のいかなる学問、思想、哲学、主義では癒されないことに気付いている。自分の生きる意味や目的を求め、時代や場所によって変わらない不変的真理を求めてもがいている。

この論文は、このような現代社会の精神的状況を視野に入れながら、牧会カウンセリングの新たな可能性を明らかにしようとするものである。「牧会カウンセリング」は、元来キリスト教会内で発達した学問である。牧会カウンセリングの誕生当初を見ると、20世紀後半に入って発達した臨床心理学やカウンセリング学の知見を教会が関わる問題に援用したもの

である。⁽¹⁾ 現代の代表的牧会カウンセラーのH・クラインベルは「牧会カウンセリングは人間を新しく生まれ変わらせ、また、種々の関係や集団の再生のために道具を提供することによって、教会に生気をよみがえらせるために貢献する」と述べて、牧会カウンセリングが教会に貢献するものとして発達したことを明らかにしている。⁽²⁾ その意味で、牧会カウンセリングは、キリスト教教会の枠内でその存在が認められてきた。

牧会カウンセリングがキリスト教信仰に立った人間観・救済観をもって来たことは明らかである。クラインベルは次のように語っている。「カウンセリングの関係は、『罪』の本質である神からの疎外、人からの疎外、そして、自分自身からの疎外を克服するための助けとなることができる。カウンセリングにおいて、牧師と来談者とは、人間の深い水準における基本的神学的問題について互いに苦闘するのである。問題点が神学的名称と一致しようとすまいと、神学的問題がカウンセリングの中心に存在する。すなわち、罪と救い(つまり和解)、罪と赦し、審判と恩寵、霊的死と再生などである。真の意味で、人間関係と生きる意味とのより広い世界へ再生することが、牧会カウンセリングの最終目標である。カウンセリングは、『あなたがたは新しく生まれなければならない』と語った若き大工- 預言者の言葉に対する有効な応答である」と述べて、牧会カウンセリングの特徴はイエスキリストにある新生にあると言っている。⁽³⁾ このような理解は牧会カウンセリングをキリスト教教会内に閉じ込めることになっている。⁽⁴⁾ その為に牧会カウンセリングではキリスト教の信仰

(1) 西垣二一「教会史における牧会カウンセリングの歴史」『現代キリスト教カウンセリング第1巻』日本基督教団出版局、2002年、36-54頁、あるいは、H. Clinebell, *Pastoral counseling movement*, Rodney J. Hunter ed., *Dictionary of Pastoral Care and Counseling*, Abingdon Press, 1989、pp857-858 が牧会カウンセリングの歴史について詳しい解説を載せている。

(2) H・クラインベル、「牧会カウンセリングの基礎理論と実際」佐藤陽二訳、聖文舎、1980年、19頁。

(3) 「牧会カウンセリングの基礎理論と実際」H・クラインベル、佐藤陽二訳、聖文舎、1980年、62-63頁

(4) 牧会カウンセリング、聖書的カウンセリング、キリスト教カウンセリングなどの名称が用いられる。それぞれの概念の詳しい検討は、ここではしない。

に立つ教会の中での働きに限定される結果となり、牧会カウンセリングが教会外の人に対しての貢献は少なかった。また、牧会カウンセリングの理論がキリスト教神学に基礎を持ち、その実践がキリスト教内に限られていた為に、他のカウンセリングとの対話も困難であった。一般的カウンセリングからは、人間観や治療論が異なる為に対話の為の基本的共通概念がないと思われたきた。このようなことは両者にとって好ましいことではない。このような限界や困難性を打ち破って、牧会カウンセリングが現代人全体に有効性をもつことを明らかにする必要がある。

その意味で、この論文は、牧会カウンセリングがこの時代の精神状況で痛み苦しんでいる人の必要に対して、如何に応えていくかに答えようとするものである。特に、教会内に留まっている牧会カウンセリングが、教会外の人々の魂の痛みに応える方法として新たな可能性を探ろうとするものである。主イエスは「わたしは羊のためにわたしのいのちを捨てます。わたしはまた、この囲いに属さないほかの羊があります。わたしはそれをも導びかなければなりません」(ヨハネ10:16)と言われ、教会外の人々への責任が示されている。

この論文では、教会外にいる人々への牧会カウンセリングの可能性を、人々のスピリチュアリティ(霊性)にあると考えている。まず、スピリチュアリティの本質についての先行研究についてふれる。それから、死に逝く人々が遺した闘病記・遺稿集・日記・エッセイなどを資料にして、それを分析・解釈して明らかになったスピリチュアリティの本質を述べる。⁽⁵⁾ スピリチュアリティの本質を明らかにした上で、人間のスピリチュアリティに焦点をおくカウンセリングの可能性を明らかにする。更に、岸本英夫

ただ、牧会カウンセリングでのカウンセラーの役割は「羊飼い」の役割である。弱り果て、傷つき、倒れた羊のそばに付き添い、手厚いケアをする者である。その際、羊飼いと羊の関係は、羊の種類や所属に無関係で、唯ケアに重点がある。それに対して、聖書的カウンセリングも、キリスト教カウンセリングも、「聖書」や「キリスト教」が前面にでる傾向があって、三者間には多少重点の置き方に違いがある。

(5) 詳しくは、窪寺俊之「死に逝く人のスピリチュアリティ覚醒の研究」(大阪大学人間科学部提出博士論文)を参照。

のケースを取り上げて、スピリチュアリティに焦点をおくカウンセリングの可能性をケースの中で明らかにする。最後に、「結論」で牧会カウンセリングが現代人の魂の問題へ貢献できる多くのものをもっていることを明らかにしたい。

【1】スピリチュアリティへの関心

現代人の魂のケアに関する研究で、重要な働きをしているD・S・ブラウニングは、「神学と牧会配慮」⁽⁶⁾というシリーズの編集の責任を負っているが、そのシリーズの一つである著者ネルソン・S・T・サイヤーの「スピリチュアリティと牧会配慮」⁽⁷⁾の冒頭で次のように述べている。過去数十年の間、神学者も教会も、キリスト教信仰を現代人の精神に受け入れられる知的なものと理解してきた。けれども、最近、一般的にスピリチュアリティと呼ばれるものが注目されている。そして、スピリチュアリティとは、聖なるものとも繋がっている感覚を深める教えや行為のことである。スピリチュアリティに対して牧会カウンセリングが関心を向けることは、大切なことである。

ブラウニングの主旨は、キリスト教信仰は理性的に把握する傾向があったが、スピリチュアリティという観点から理解できるし、人々は人間を超えた聖なるものに関心が寄せられている。だから、牧会カウンセリングがスピリチュアリティに注目することは大切であるとブラウニングは主張している。このブラウニングの指摘は、牧会カウンセリングの新たな可能性を開くものと言える。

スピリチュアリティの研究は、神学者、心理学者を始め、臨床にある看護者たちからもなされている。⁽⁸⁾ それぞれの研究者は研究方法は異なる

(6) Don S. Browning, ed., *Theology and Pastoral Care*, Fortress Press, Philadelphia, 1985.
 (7) Nelson S.T. Thayer, *Spirituality and Pastoral Care*, Fortress Press, Philadelphia, 1985, p.7.
 (8) 次の書物を参照、Kenneth J. Doka with John Morgan, ed., *Death and Sprituality*,

けれども、人間の根源的問題に関心を示したものであり、人間が人間であるために、必要な要因を明らかにしたものである。その意味でスピリチュアリティの研究は、すべての人に普遍的に存在するものを明らかにしようとするものである。すべての人に普遍的に存在するスピリチュアリティの本質が明らかになれば、それゆえにスピリチュアルなものの意味内容の分析で、牧会カウンセリングの可能性が拡大することになる。

【2】「スピリチュアリティ」の世界保健機関の定義

スピリチュアリティの本質を明らかにすることは、この論文の課題の一つである。スピリチュアリティについて、世界保健機関（WHO）の定義を見ることにする。

「スピリチュアル」とは、生活の諸側面に関わるものであるが、特に身体感覚を超えた体験を表す言葉である。多くの人には、生活でスピリチュアルな面には、宗教的要素が含まれる。スピリチュアルな面とは、全てものを統合するものと言えるかもしれない。つまり、身体的、心理的、社会的な要素の全部を一つにまとめるものである。スピリチュアルな側面は、人生の終末が近づいて来た人が、意味や目的を求めるときに観察できる。また、多くの場合、赦し、和解、価値の確認など関わっている」(窪寺私訳)⁽⁹⁾

世界保健機関の「スピリチュアル」の定義は、末期ガンの苦痛に苦しむ患者へのケアという視点を持っている。この様なケアの視点は、特に現代医学では不治な末期ガン患者が人間らしく生きる為の援助を示すものであ

Baywood Publishing Company, Inc. Amityville, 1993. 牧会的視点からの研究は次の文献に詳しい、Larry Vandecreek, ed., *Spiritual Needs and Pastoral Services*, Journal of Pastoral Care Publications, Inc., 1995.

(9) Report of a WHO Expert Committee, Technical Report Series 804, "Cancer Pain Relief and Palliative Care" World Health Organization, Geneva, 1990, pp.50-51、日本語翻訳は、武田文和訳、世界保健機関編「がんの痛みからの解放とバリアティブ・ケア」金原出版、1993年、48頁。

【3】スピリチュアリティの分析

る。⁽¹⁰⁾ 教会カウンセリングでもクライアントは解決のない問題で苦悩する人が多い。例えば、自殺未遂を重ねる男性、その家族へのカウンセリングは、ケア中心の継続的援助が必要になる。継続的援助を必要とするケースの教会カウンセリングを考える際に、このようなケアの概念が重要な意味をもっている。世界保健機関の定義を分析すると、次のような特徴が見える。

スピリチュアリティの認識法は、身体的感覚を超えたものである。その領域は、宗教的なものと接近している。その機能は、身体的、心理的、社会的要素を一つに統合するものである。もう一つの機能は、赦し、和解、価値の確認などである。第3の機能は、スピリチュアリティは人生の意味や目的を与えるものである。スピリチュアリティは死の接近によって覚醒する。

このようなスピリチュアリティの理解は、教会カウンセリングの新たな可能性を考える時に非常に示唆に富むものである。教会カウンセリングはキリスト教に基盤を持っているので、一般のカウンセリングでは問題にしない霊的出来事に関心をもっている。その点を世界保健機関は超身体的感覚としてとらえ、人間存在の土台として理解している。また、キリスト教の中心はイエス・キリストの十字架上の贖罪にあり、それゆえに、世界保健機関の言う赦し、和解、価値の確認などは、キリスト教の福音の中心である。また、キリスト教は、イエス・キリストとの個人的出会いによる新たな人生の意味や目的の発見であるから、世界保健機関が指摘するスピリチュアリティは人生の意味と目的を与えるものとの指摘と共通する。このようなことから、ここではスピリチュアリティについて詳しく検討することで、教会カウンセリングの新たな可能性が開かれる。

(10) 長い間、医学の目的は病気の治療（cure）であった。末期ガンの治療は現代の最先端の医学でも不可能である。不治の末期ガン患者の治療継続は、患者の苦痛を増加させるが効果がない。そこで生まれたのが看護（care）中心の医療である。不治の病気をもつ患者のQOLを重視する医療である。

(1) spirituality（スピリチュアリティ）とは何か

spirituality（スピリチュアリティ）は、英語辞典には、人間の生命力の根源、生氣、心、精神、魂、精霊などの訳が付けられている（『ランダムハウス英和大辞典』小学館）。spirituality（スピリチュアリティ）の語源は、spirit（スピリット）である。そして、スピリットはラテン語のspiritusに語源をもっている。更に、キリスト教の影響を受けていて、旧約聖書の創世記に遡ることができる（創世記2：7）。「神は息を吹き込まれた。すると生きるものとなった。」創世記の記事では、神の息（スピリット）を受けて、人は生きるものとなったという。この記事から少なくとも3つのことが導かれる。第1は、人間存在の根拠にふれるもので、息（スピリット）が吹き込まれて始めて生きたものとなったとは、神から離れては人間の存在はないことを示している。神からの息を必要としていて、それで人間が人間となれるのである。第2は、人間の精神活動は、神の知恵・生命・教え・勇気などを必要とするということである。神の知恵・生命・教えなどがなくては、人間らしい生き方はできなくなるのである。第3は、人間存在は実際的には各々「わたし」という存在として具体化するから、スピリットは、「わたし」がわたしであることを支えるものである。スピリットを受けて始めて個性をもった「わたし」という人間となり、他者との共通性を持ちながら、固有性をもった人間となったのである。

この第3の点に注意しなくてはならない理由は、カウンセリングでの問題は、抽象的「人間」ではないからである。生の不安や対人関係で悩み苦しんでいるのは、具体的「わたし」だからである。そこには「わたし」の個人的成育歴や現在の人間関係や経済的状況などが具体的問題になる。それが重なり合って、「わたし」は、不安になり、心に傷を受け、痛み、苦しむ。創世記の記事は、そのような主体的・個性的「わたし」を生きる究極の根拠が神との関係にあるとしているのである。その意味で創世記の記事からカウンセリングでの中心概念として「わたし」を問題にすることは

聖書的であると理解してよい。

(2) スピリチュアリティと「わたし」意識

スピリチュアリティは多様な内容を含んでいる。そして、スピリチュアリティの中心概念が「わたし」意識にあると考える。⁽¹¹⁾ 筆者は公に刊行されたガンを患って死に直面した人たちの闘病記・遺稿集・日記・エッセーを51冊(45人)を選出した。そして、その書物に現れた魂の叫びを分析することで、スピリチュアリティを明らかにしようと試みた。選出の基準は、第1に末期ガン患者で死に直面していること。第2に特定の宗教・信仰を持っていないこと。第3に既存の宗教への入信を希望していないこと(例えば、高見順・西川喜作など)である。それを資料にして、死に直面した人の危機体験を明らかにした。

そこで明らかになった結果は、死の危機体験は「わたし」意識を崩壊させることである。つまり、「わたし」意識は、死の接近によって、肉体的能力の減退(喪失)・容姿の変化・生活管理能力の低下・感情の動揺・役割の危機・社会的立場の危機・経済的不安定・生きる意味/価値の喪失・時間の危機・人生の終り方の不安・信じるものの喪失・将来の不安などを経験する。健康な時にもっていた安定した「わたし」意識は崩壊し、自分自身がどう生きるかが分からなくなり、苦痛を感じ、「わたし」意識の再構築(これを「癒し」と呼ぶことができる)が必要となる。これらの資料には、言葉に出来ないうめき、叫び、訴えがあり、また、戸惑い、怒りなどが赤裸々に語られている。さらに、奇跡や救いを求める姿があった。それは、死に直面した「わたし」をどう受け止めるかという現実である。崩壊

(11) 「わたし」意識という概念は、従来、「自己理解」「自己概念」「自己イメージ」などとして見られてきた。これらの理解と、「わたし」意識との違いは次のようである。「自己理解」「自己概念」「自己イメージ」などには、思考過程をへた結果としての抽象的概念となっている。これに対して、「わたし」意識は、現在感じている体験を強く表現している。怒り・不安・孤独を感じている「わたし」を意識し、死が迫っていることで怯える「わたし」を表現するものである。

した「わたし」の再構成のために宗教に関心を示したり、まじない・占いなどにも関心をしめず。危機に直面した人の「わたし」意識の再構築には、多様な要因が含まれている。特に大きく分類すると、3分野に整理できる。心理学的・哲学的・宗教的要素である。

心理学的要素：死の不安・恐怖・苛立ち・疎外感・焦燥感などを解消して、安らぎ・平安・落ち着き・冷静さを与えてくれるもの

哲学的要素：「なぜ、わたしが……」などの疑問・懐疑に答えてくれるもの

宗教的要素：将来の不安・死後の生命などを解消して、希望を与えてくれるもの

スピリチュアリティは、「わたし」意識と深く関わり、崩壊した「わたし」意識を再構築するために機能することが分った。人間が自分自身をどのように意識するかに関わる問題である。カウンセリングにくるクライアントは諸々の問題に直面してて悩み苦しんでいる。その悩みは単に問題ではなく、むしろ、崩壊した「わたし」意識が中心にある。そして「わたし」意識には、心理学的・哲学的・宗教的要素が含まれているのである。つまり、心理学的・哲学的・宗教的視点を持ちながら、その問題の中心にある「わたし」意識を支える必要がある。

スピリチュアリティに関心を持ちつつ行うカウンセリングは、宗教的視点からのみ人間を捉えようとするよりも広い視点を持つことが出来る。それによって、宗教に無関心な人たちへの援助する道を開くものである。

[4] 牧会カウンセリングと「スピリチュアリティ」

以上の研究から、牧会カウンセリングの新たな可能性が明らかになる。牧会カウンセリングがスピリチュアリティに関心をもつということは、少なくとも、具体的には、牧会カウンセリングは、次のような3つの特徴をもつ。クライアントの「わたし」意識にカウンセリングの関心を集中する、クライアントの「わたし」意識の再構築の要素として、心理学的・

哲学的・宗教学的要素に関心を示す、その再構築（「癒し」）のために、危機に直面した人たちは「外的絶対的他者」と「内的究極的自己」に関心を向ける傾向がある。

ここでは、「わたし」意識の再構築の2つの道として「外的絶対的他者」と「内的究極的自己」の道についてのべてみる。

(1) 「外的絶対的他者」

危機に直面して自分で負いきれない重荷を負った人は、自分以外のものに救いを求めている。神仏など人間の存在を超えたものである。「外的他者」とは、自分以外のもので、自分を援助してくれそうなものを探し求めるのである。このような自己を超えるものを求め、生命・力・希望を受けたいと望む。また、それと一体化することをイメージすることで、消滅する人間が消滅を回避できるのである。自己保存するための一つの防衛機制として、スピリチュアリティが働いている。

(2) 「内的究極的自己」

究極的なものは、「わたし」理解の根底にある構成要素の一つで、具体的には、生きる為の究極的意味・目的・価値などである。死という二度と経験できない危機を生きる為には、その時、その場で把握できる根源的・最善のものでなくてはならない。表層的・一時的であってはならない。直面している危機の不安・恐怖を克服して、自分が納得できる最善のものである。自己の内側を探りながら、自分の納得いく人生の意味・目的・価値を探ろうとする。特に危機状況に置かれているので、全面的に納得いく意味などは見つけにくい。しかし、自分の直面している危機の中で生きる為に見つけ出せる最善の意味・目的・価値を見つければ生きられない。

「内的究極的自己」がスピリチュアリティであることは、自己を実現するためには、自分らしさ・自分の特殊性が含まれるからである。神の口から人間にスピリットが吹き込まれた時、人間が人間存在になった。同時に、スピリットが吹き込まれた時、総称としての人間が人間となっただけでな

しに、各個人がそれぞれ特殊な人間となったのである。人間が生きるとは、個人としてかけがえのない存在となることである。具体的には、各個人が自分の人生の意味・目的・価値を見つけ出すことである。「人生の意味」は、自分を自分とする決定的条件であるから、スピリチュアルな問題なのである。

スピリチュアルなものに関心をもちカウンセリングでは、クライアントが「外的絶対的他者」と「内的究極的自己」の中に、崩壊した「わたし」意識の再構築（癒し）を求めるのである。この事実は、人間の普遍的傾向である。筆者の研究では、「外的絶対的他者」として神仏は、もちろん、自然・宇宙などを想定して、危機の中での生きる土台としている。このような傾向が人間には備わっていることを、次のケース（岸本英夫）で見よう。

【5】岸本英夫のケース

岸本英夫は1903年に生まれて、キリスト教の一派であるユニテリアンの父親（岸本能武太）をもって誕生した。父親は日本女子大学で教鞭をとっていた。岸本は青年時代までは、キリスト教信仰をもっていたが、聖書に書かれている奇跡が信じられなくなり、キリスト教信仰から離れた行った。⁽¹²⁾ 岸本は元来、理科志望であったが、東京大学文学部宗教学科に入学し、宗教学を学んだ。大学卒業後、アメリカのハーバード大学に留学し、古代インド哲学者ウツツ教授のもとで研究生活をした。帰国後は、東京大学で教鞭をとり、科学的宗教学の構築に力を注いだ。⁽¹³⁾

1954年9月、岸本はアメリカのスタンフォード大学に出向いて客員教授

(12) 岸本英夫「わが生死観」(講談社文庫、1973年)の中で、「私は、敬虔なキリスト教の家庭に育った。私自身も子供らしい熱心な信仰をもっていた。しかし、青年時代に、私は奇跡をおこなうことのできるような伝統的な人格神信仰は、どうしても信じることができなくなった。その意味で、神を捨てたのである」(18頁)。

(13) 「宗教現象の諸相」「宗教学」「宗教神秘主義」「世界の宗教」などは、その成果である。

として講義していた最中に、左頸部の顎の下に黒色腫が見つかり、「あと半年の命しか保証できない」とつげられ、手術を行った。⁽¹⁴⁾ 日本に帰国後、度重なる手術を繰り返しながら、10年間ガンを患い、死と直面することになる。岸本はキリスト教を捨てたので、二度と自分からは信仰に入ることはなかった。1954年から1964年の岸本は、死に怯えながら、唯死を忘れる為に仕事に没頭して生きた。⁽¹⁵⁾

岸本は宗教学の構築に力を注いだ、その方法は観察可能な出来事を積み重ねる方法であって、主観的宗教経験は排除して、科学的宗教学の構築を目ざした。

岸本は客観的なものしか認めなかったから、「死後の世界や、自分の肉体を離れた靈魂の存在を信じない」と述べている。⁽¹⁶⁾

この岸本が死を迎える数年前に書き残した論文の中で、自分の魂の行き先について、次のように書いている。「すでに別れをつげた自分が、宇宙の霊にかえて、永遠の休息に入るだけである。」⁽¹⁷⁾ また、死の一年半前の論文には「私の死後は、大きな宇宙の生命力の中に、とけ込んでしまっただけでなくと考えるぐらいが、せい一杯であります」⁽¹⁸⁾と書いている。この事は、科学的宗教学の構築を目ざした岸本の態度とは、矛盾するのである。客観的事実に立つ宗教学の構築を目ざしていた岸本が、奇跡や科学的証明不可能なものを否定していたのに、死の直前になると霊の存在を認め、宇宙の霊にかえて永遠の休息に入るというのは非常な矛盾である。⁽¹⁹⁾ 岸本は自分の宗教学を次のようにのべている。

このような矛盾が起きるのは、死の危機が岸本を理性的から、感情的に傾かせたからだと言える。ここに岸本自身の心境の変化がある。岸本は健

(14) 岸本英夫『死を見つめる心』講談社文庫、1973年、54頁。

(15) 同書、29頁「ただがむしゃらに、働いた。」

(16) 同書、27頁。

(17) 同書、33頁。

(18) 同書、38頁。

(19) 岸本は自分の宗教学を次のようにのべている。「私はいろいろの宗教の外側にたって研究することを専門としている学究である」。宗教の外側に立って、客観的に観察することで宗教学の構築を試みた。同書、27頁。

康な時は、科学的・客観的思考を重んじていたが、死の危機に直面すると、主観的・感情的になって、自分の存在の継続を求める傾向になったといえる。ここにスピリチュアリティがある。スピリチュアリティは超科学的・超客観的・主観的傾向をもつものである。その超科学的・超客観的なものを認めることで目に見えない神の存在が認められ、結果的には奇跡の可能性も生じてくる。

超科学的なものの中に自己の存在の継続や意味付けを見つけようとする機能がスピリチュアリティである。岸本は宗教を持たなくとも、岸本の中にスピリチュアルな必要が生得的にあって、死の危機に直面して、スピリチュアリティが覚醒し、スピリチュアルペインが起きたと言える。岸本にとって、死後の生命が無に消えることは、受け入れ難いことであった。理性では認められないことであった死後の生命について、感情的には、認めるような心境の変化は、どこから来たのか。死の危機は死後の生命があって欲しいという願望を生じさせたのである。このようなものをスピリチュアルニーズをいうことができる。

岸本にとってスピリチュアルニーズに応える方法は、自分の霊は宇宙の霊にかえることであると、自分に言い聞かせたのである。このことを別な言い方をすれば、ここにスピリチュアル・カウンセリングの必要が存在していると言える。

岸本が自分の霊は宇宙の霊にかえて休息にはいるというのは、科学的宗教学者としては、矛盾していることである。岸本は厳密な意味ではキリスト教的でない。ただ、岸本が霊的な世界に入って休息に入るという願望をもっていたといえる。そして、宗教には無関心を装っているが、魂では、死後の問題に悩んでいる。それはスピリチュアルなカウンセリングを必要としているといえる。その意味で援助の方法を考える必要がある（使徒17：22～23「あらゆる点から見て、私はあなたがたを宗教心にあつい方々だと見ております。……あなたがたが知らずに拝んでいるものを、教えましょう」）。そこで、岸本のケースをスピリチュアル・カウンセリングの視点から考察してみよう。

(1) 岸本英夫に於ける「わたし」意識

岸本はアメリカでガンが発見された時の様子を書き残している。「ジッとしてみられないような緊張感」、「われしらず、叫び声でもあげてしまいそうな気持ち」、「今夜は、えたいのしれないかたまりになって私の上に襲いかかって来そうな気がした」(55頁)。足は震え、心は動揺し、自分で自己コントロールができない。そこで岸本は、風呂に入り、座禅の数息術をし、睡眠薬を取った。それでも落ち着かない。岸本は自己コントロールできない「わたし」を抱えて必死になった落ち着かせようと試みる。パニック状態になった「わたし」を最も意識した。日常生活での自己理解を越えて、実感としての「わたし」を意識し、自分の人生観・価値観を含めて、「わたし」を支えていた人生の土台を意識する。ここには「わたし」意識の鮮明化がある。死の危機に直面して「わたし」を負いきれない。自分をコントロールできないからといって、この「わたし」から逃げられない。そして周りの人たちから遠くに離れていく「わたし」が疎外されるのを感じた。

このような岸本の問題には、キリスト教信仰を全面に掲げた牧会カウンセリングでは取り扱いにくい。岸本は宗教家からカウンセリングを受ける気持ちがない。岸本自身、自分は「いろいろの宗教のおしえについては、表も裏も知っているつもりである」(27頁)と自負している。その上で、青年時代にキリスト教信仰を破棄した。だから、宗教家であり、牧師である牧会カウンセラーからの援助を受ける筈はない。

しかし、岸本はこの時期、最も「わたし」を意識していた。自分のガンという病気の怖さ、その怖さに襲われた「わたし」から逃げようとして、仕事に没頭した。更に、家族の将来、家族を支える経済的保証を与えなくてはならない「わたし」の責任を強く認識していた。

スピリチュアル・カウンセリングの視点は、岸本の動揺した「わたし」意識に焦点を合せて、崩壊した「わたし」の自立への援助が目指されることになる。心理学的・哲学的・宗教学的視点から、岸本が、今、経験している動揺している「わたし」を受け止められるようにする援助である。岸

本の存在全体を受け止めながら、岸本の「わたし」意識に注目して、崩壊した「わたし」意識を人間を超えたものとの関わりの中でつかみなおす作業である。

(2)

先に述べたように危機は宗教への関心を持たせるものである。岸本も魂・霊魂に関心を持ち始めた。魂・霊魂への関心は、岸本の魂の渇きから出たものである。岸本は自ら魂・霊魂の問題に関心をもった事実は大い。自分の生を支えるものを、観察可能なこの世に求めずに、目に見えず、観察できないものに目を向けるのである。感情的に弱った魂に温かい支えを与えるのを必要としたのである。理性的・知的・客観的事実を超えた世界に目を向けたのである。このような世界は物事を証明するものではなく、人生に内的意味に与えるものである。死に直面して、自分を支えられなくなった「わたし」に集中している中で、自分の限界・運命に気付くので、そこから超科学的・超客観的世界に目を向けていく。先に述べたように、それを「外的絶対的他者」「内的究極的自己」と呼ぶことができる。それは危機に遭遇すると覚醒される。その覚醒されるもの、つまり、スピリチュアリティこそ、人間存在を支える土台となるものである。岸本の心の世界を支えるのである。ここに積極的に関わる援助の必要性がある。

(3)

スピリチュアリティが覚醒されると、人は謙遜になり、素直になり、正直になる。スピリチュアリティは自分の日常性を超える生命・力・真理・永遠・無限などが支配している世界だからである。そして、スピリチュアリティが覚醒された人々には、しばしば、神を敬虔に信じる人にお互いに共鳴するものがある。だからスピリチュアリティの覚醒は、キリスト教への反発を引き出すよりも、むしろ、キリスト教への関心を持たせるものである。岸本が自分の死後・霊のことを言い始めてから、人生への受け止め方に変化がみえる。「癌のおかげで、ほんとうの生活ができるのだとい

う感じがするのである」⁽²⁰⁾と述べている。岸本は死まで宗教には積極的関心を示さなかった。それは岸本自身の死について一緒に考える人を持っていなかったことにもよる。岸本は自分の死について相談する人を必要としなかったのかもしれない。しかし、死後の問題について明確な解答をもっていなかった。もし、適切なカウンセラーがいたならば、死後の問題についても確信を得ることができたのではないか。

私の経験から言えることは、スピリチュアリティの覚醒した人は、キリスト教に深い関心と尊敬をもっている。スピリチュアリティの覚醒した人は、神の創造の世界の中で自己の存在を見つけることが出来た人である。

結論

この論文は、教会カウンセリングの新たな可能性を明らかにしようとしたものである。キリスト教カウンセリングは、キリスト教人間理解、救済論にたっている。そして、そのキリスト教信仰の中に、真の救済があることを信じている。この真理について教会カウンセラーは疑いをもたない。いや、むしろ、教会カウンセラーは、カウンセリングの有効性・限界を十分承知し、かつ自分自身の無力さを十分承知している。だから、神の介入なしでは全く無力であることを承知している。その上で、クライアントのスピリチュアルな側面に目を向けるカウンセリングは、キリスト教信仰をもつことを望みつつも、人生の価値観や生き方の違いを認めて、むしろ、その人自身を受け入れることに中心をおく。その人の個人的背景・価値観・文化的背景を重んじて、その人らしい生の実現への援助をすることである。

スピリチュアルなものを見るカウンセラーは、クライアントの人生の土台を重んじる。唯、人間として苦しみ痛み傷ついている人間自身への援助に焦点をおく。特に、「わたし」を失い、見出せなくなっている時に、そ

(20) 岸本英夫「別れのとき」前掲書、34頁。

のクライアントも神の被造物であり、愛の対象であることを信じて受け入れ、クライアントを支えることで、神の愛の真実に気付くように援助をするのである。神がその人を愛されるように、真実をもって愛すことで、クライアントの魂の傷は癒されていく。

スピリチュアル・カウンセリングの目的は、「わたし」が罪人であった時、愛して受け入れられたように、今だ神を知らずにいる人を愛して受け入れるようにと援助することである。徴税人マタイは、収税所に座っている時にイエスの招きを受けた。「わたしに従ってきなさい」というイエスの招きには、徴税人マタイの品性や職業を条件にすることはなかった。イエスは、「私が来たのは、罪人を招くためである」と言われた。教会カウンセリングは、キリスト者だけに限られるべきものではない。だれでも教会カウンセリングに招かれて、「わたし」の生き方、価値観、人間関係を見直すための援助である。

教会カウンセリングが他のカウンセリングと対話する道がここから開かれる。「わたし」意識の再構築（「癒し」）は、カウンセリングの共通概念に為り得る。カウンセリングは、しばしば、問題行動の解決に焦点を当てやすい。人間関係のトラブル・親子関係の不和・離婚・不登校・引きこもり・自殺・非行・離別・死の恐怖・悲嘆など、すべてが解決したい問題である。その問題に目が奪われてしまうと、教会カウンセラーは、聖書に解決があると、み言葉を引用して示しやすい。クライアントが必要なのは、聖書の言葉を聞かされることではない。むしろ、クライアントの悩み苦しみを分って貰いたい。また、苦しみを負っている「わたし」の気持ちを分って貰いたい。また、苦しみを負っている「わたし」を支えて貰いたい。具体的課題を負っている「わたし」こそ、今、危機にある。根源的問題の解決は、「わたし」を支え、生きる意味を与えて欲しいのである。

福音的立場に立つ教会カウンセリングは、御霊の働きを信頼する。御霊の働きだけが、クライアントの真の問題を理解できる。「御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が言いようもない深いうめきに

よって、私たちのためにとりなしてください」(ローマ8：26)。御霊の働きを通して、カウンセラーはクライアントの問題に気付かされる。また、聖霊の働きを通して、クライアントの無意識にある真の問題を言語化する援助が出来るのである。真の問題は、本人にもカウンセラーにも分らない。クライアントが自分の真の問題に気付けるのは、聖霊の介入があって、意識化できる時だけである。カウンセリングは、無意識下に抑圧された問題の意識化の作業でもある。意識化・言語化が出来て始めてクライアントは、問題の解決に向かうのである。

また、カウンセラーがどう言うべきかは、カウンセリングを方向付けるものである。そして、聖霊の導きがなくては、真の助けになる言葉を言うことができない。「ただ、そのとき自分に示されることを、話しなさい。話すのはあなたがたではなく、聖霊です」(マルコ13：11)。カウンセラーがクライアントに何を話すべきかは、張り裂けるほどの緊張が必要である。魂に語りかける言葉を見つけることは、人間のわざではない。聖霊の助けがあって初めて語る事ができるのである。

(関西学院大学教授)